第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

1　立地と構造

五斗長垣内遺跡は、瀬戸内海最大の島である淡路島に所在する。行政上の所在地は、兵庫県淡路市黒谷1411番外にあたる。立地は、淡路島北部の西側斜面、海岸から約３㎞、標高200ｍの丘陵上にあり、眼下には播磨灘を行き交う船が一望できるほか、その向こうには瀬戸内に浮かぶ家島群島の島影や播磨地域を見渡すことができる場所に位置する。

淡路島北部の地形は、中央を南北に貫く津名山地が存在し、山地と海岸線の間に比較的なだらかな地形が連なる丘陵が存在する。山地に源を発する河川はこの丘陵部を浸食し、掌指状の尾根を形成する。遺跡は、この丘陵部に形成された東西に延びる尾根上に営まれている。尾根の規模は、東西延長約500ｍ、南北幅約50ｍを測る。発掘調査前の遺跡は、このような地形を切り崩して造成し、河川の水を引いた水田として利用されており、急峻な斜面に営まれた棚田の風景が広がっていた。

平成17年に刊行された『北淡町遺跡分布図』には、「垣内（かいと）遺跡」の名称で、弥生時代と中世の遺物散布地として掲載されていた。実際、発掘調査前の遺跡は、小さな弥生土器や中世の土器片がわずかに散布している程度で、発掘調査で確認されたような鍛冶に関する遺跡の様相は窺い知ることができなかった。また、遺跡の内容や範囲を把握する目的で、平成17・18年度に実施した確認調査においても、弥生時代後期の集落址の存在が確認できたものの、この時点においても鍛冶に関連した遺構や遺物の確認には至らなかった。周辺には、山ノ神遺跡（後の発掘調査で弥生集落であることが確認された）や萩尾遺跡、黒谷庄田遺跡など、中世の土器片が散布する遺跡が発見されていたが、五斗長垣内遺跡のような遺跡の存在は知ることができない状況であった。

2　地理的環境

遺跡が所在する淡路島は、瀬戸内海の東端に位置する島で、周囲約174㎞、面積約597㎢を有する。月平均気温が14℃前後で年間降水量が1000㎜と温暖少雨の気候である。周囲は年間を通して波穏やかな瀬戸内海の海であり、物資の運搬には最適の海上交通路を提供していたものと予想できる。しかしながら、本州及び四国との間には激しい潮流の明石海峡、鳴門海峡が存在しており、現在も航行が困難な海の難所とされている。したがって、古来、播磨灘と大阪湾との往来には相当の労力を要したことが予想できる。

また、淡路島の地形は、先山南麓と湊を結ぶ線をもって大きく南北に二分される。淡路島南部には、標高608ｍの諭鶴羽山を最高峰とする山塊が存在し、そこから流れ出す倭文川、成相川、三原川、大日川等の河川が淡路島最大の三原平野を形成する。一方、北淡路は津名山地が大半の地形を占める。山頂部は、標高515ｍの常隆寺や522ｍ妙見山を最高峰とし、小さな起伏を持った緩やかな高原状の地形を呈するが、東西両側は急斜面を成す。山麓域には丘陵や台地・低地が存在するが、幅が狭く、大きな河川や平野の発達は認められない。

このような急峻な地形を形作るのが活断層である。山地の東側に楠本断層・東浦断層、西側に野島断

層・浅野断層が北東―南西方向に走るほか、これらと直行する北西―南東方向の志筑断層や育波断層などが存在する。これら活断層の運動により山側が隆起することによって形成された地形といえる。断層に沿った急斜面（断層崖）の下部には明瞭な傾斜の変換線が伴っており、それを境とした海側には比較的なだらかな丘陵が広がる。

淡路島北部の地質は、大部分が花崗岩類、神戸層群、大阪層群からなる。山地部を形成するのが六甲山系から連なる花崗岩類で、この基盤山地の境界に沿って神戸層群や大阪層群が分布する。島西部の富島から育波に伸びる浅野断層に沿っては大阪層群が広く分布し、標高100～200mの丘陵部を形成する。遺跡は、この浅野断層に沿って形成された丘陵の最深部、断層崖の際に位置している。

参考文献

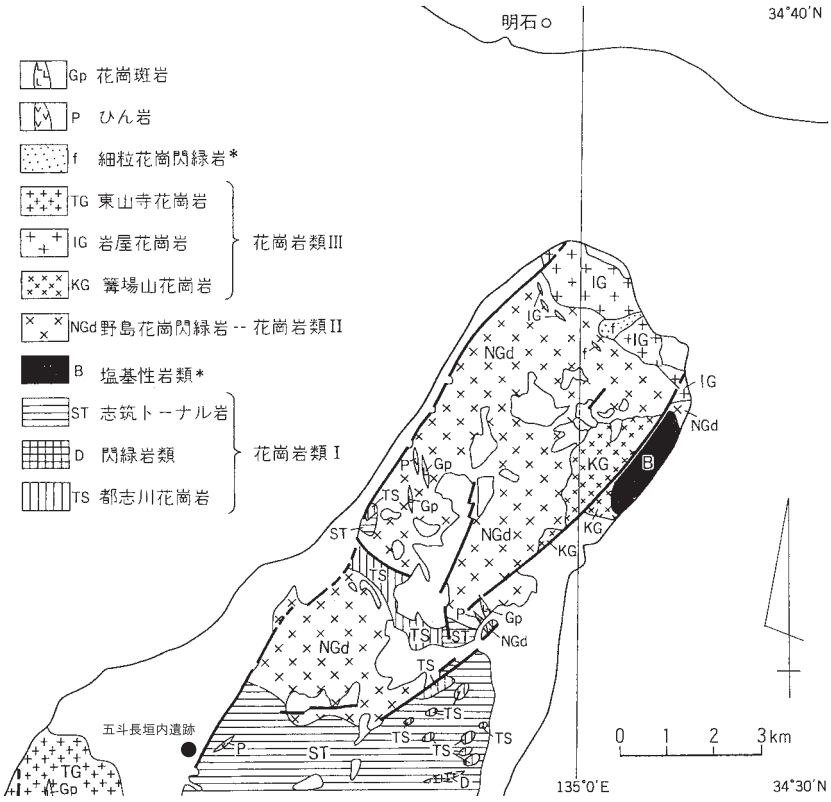
北淡町 1975『北淡町史』

水野清秀ほか 1990『明石地域の地質』地質調査所

高橋浩ほか 1992『洲本地域の地質』地質調査所

樽野博幸 1988「地形と地質」『津名町史』津名町

植松剛・樽野博幸 2000「自然と風土」『東浦町史』東浦町



第２図 遺跡周辺の地形と地質図

水野ほか『明石地域の地質』を一部改変

3　歴史的環境

淡路島は、『古事記』『日本書紀』の冒頭を飾るイザナキ・イザナミの「国生み神話」ゆかりの島として知られる。その他にも、王権と深い繋がりを持ち、海を生業の場として活躍した「海人」とよばれた人々の姿が数多く登場する。このような『記紀』に記された淡路島の姿については別の機会に譲るとして、以下では、既往調査の成果などを用いて、五斗長垣内遺跡が所在する淡路島の歴史的環境を島北部を中心に素描する。

旧石器時代～縄文時代

旧石器時代では、淡路島南部の三原平野に位置する浦壁池遺跡（南あわじ市）で採集されているナイフ型石器が島最古の遺物として知られる。チャートを素材とする縦型ナイフ型石器である。島北部では、海峡から大阪湾を望む標高約20～60メートルの丘陵上に位置するまるやま遺跡（淡路市）が知られている。サヌカイト製のナイフ形石器や細石刃・細石刃核といった石器群が出土した旧石器時代の遺跡である。

続く縄文時代では、草創期に用いられた有舌尖頭器が、島内各地で発見されており、その数は９遺跡を数える。淡路島北部では、まるやま遺跡や舟木遺跡（淡路市）などでの出土が知られる。いずれもサヌカイトを素材とする。続く早期の遺跡として、押型文土器が出土する育波堂の前遺跡や釜口船頭ヶ内遺跡（淡路市）、上ノ原遺跡（洲本市）や倭文安住寺遺跡（南あわじ市）などが知られている。また、早期後半の条痕文土器として、茅山下層式土器が楠本下林遺跡や育波堂の前遺跡（淡路市）で出土しており、瀬戸内沿岸では数少ない早期後半期の資料として注目できる。続く前期の遺跡としては、武山遺跡（洲本市）がある。昭和47年に発掘調査が実施され、北白川下層式土器など前期の土器が多数出土している。一方、北淡路では、明石海峡を望む最北端に位置するナキリ遺跡（淡路市）で大歳山式土器が採集されているほか、北白川下層式土器が採集されている湯ノ谷池遺跡（淡路市）などが知られる。また、縄文時代の淡路島を代表する遺跡として佃遺跡（淡路市）が存在する。早期から晩期まで継続する集落で、多数の貯蔵穴が確認された後期には、イチイガシなどの木の実やスズキ、タイなどの魚介類、イルカ、シカ、イノシシなどの動物の骨が出土しており、豊かな自然環境の中、豊富な食材に恵まれた島であったことが明らかとなっている。

なお、育波川流域に目を移すと、河口右岸の低位段丘上に位置する育波堂の前遺跡が注目される。前述のように、押型文土器や条痕文土器などの早期段階に出現し、その後も前期・中期・後期・晩期と縄文時代各時期の土器が出土する。古くから知られた淡路島を代表する縄文遺跡である。しかし、これらの土器は、昭和40年の旧北淡西中学校のグラウンド造成工事の際に採集されたものが大半であり、遺跡の実態はよくわかっていない。今も、グランドの隅に当時建立された記念碑が残る。遺跡は、弥生時代前期から中期にも継続することが知られており、育波川河口部の中心的集落と考えられる。なお、丘陵部では、五斗長垣内遺跡に近い黒谷小田遺跡で縄文土器片が１点出土しており、丘陵部での人の暮らしが予想できる資料である。

弥生時代

弥生時代前期から中期の遺跡は、河口部に開けた平野を中心に確認されている。島南部の三原平野に位置する雨流遺跡（南あわじ市）では前期の水田が発見されているほか、北部の志筑平野で発見された天神遺跡（淡路市）では磨製石斧や石包丁に代表される大陸系磨製石器群が出土しており、平野部での本格的な水田稲作の始まりを知ることができる。大きな河川や大規模な平野の発達が認められない島北部においても、育波川河口に位置する育波堂の前遺跡（淡路市）や今出川河口の今出川遺跡（淡路市）、浦川河口の佃遺跡（淡路市）などで前期から中期の土器が出土しており、島全域での弥生文化の定着を知ることができる。

この淡路島の弥生時代を特徴づける遺物に青銅製品を挙げることができる。銅鐸は、所在不明のものも合わせると12箇所での出土が知られる。菱環紐１式の中川原銅鐸（洲本市）に代表される古式の銅鐸が多くを占める。そのほか、14本がまとまって発見された古津呂遺跡（南あわじ市）の銅剣があるほか、幡多遺跡行當地地区（南あわじ市）で発見された銅戈などがある。これらは、江井崎出土と伝えられる尼崎市本興寺所蔵の銅鐸１点を除けば、全て淡路島南部で出土したものであり、北部では中期までの大規模な遺跡の存在は知られていない。

後期になると、それまで人が暮らした形跡の無い丘陵部に遺跡数が急増する現象が、島北部を中心に認められる。中期までの遺跡の数に比べ、およそ10倍にまでその数が激増するが、終末に向かっては急速に縮小し、古墳時代には全く姿を消してしまうという象徴的な推移を辿る。これまでの発掘調査の結果、それらの遺跡では建物跡は発見されるものの、水田や墓の遺構は未だ発見されていない。その中には、明石海峡を見下ろすことができる丘陵上で営まれ、大型の鉄鏃が出土した塩壺西遺跡（淡路市）や57個体の製塩土器がまとまって出土した舟木遺跡（淡路市）、Ｌ字状杵が出土し、朱の精製に関わったとみられる二ツ石戎ノ前遺跡（洲本市）など、近年の発掘調査で内容が明らかになってきた遺跡も知られる。

育波川流域では、前期～中期の遺跡として育波堂の前遺跡が知られる他、河口部の掛内遺跡で出土したサヌカイト製の打製石剣が中期末の人の暮らしを想定させる。しかし、現時点では、平野部、丘陵部ともに確認された遺跡の数は少ない。しかし、後期段階に入ると育波川上流の黒谷・五斗長地区や室津川上流の生田地区で遺跡が出現し、その数が急増する。五斗長垣内遺跡もその一つである。五斗長地区では、発掘調査が行われた山ノ神遺跡や柚ノ平遺跡でも狭い尾根上に営まれた竪穴住居址が確認されている。また、生田地区では、古くから生田畑遺跡や上条遺跡、色目遺跡等の遺跡が知られていたが、近年の分布調査で五庵遺跡や原尻遺跡、丸ノ内遺跡、松ノ下遺跡、笠松Ａ遺跡、笠松Ｂ遺跡など数多くの遺跡が知られることとなり、その範囲は丘陵の最深部にまで広がりを見せている。しかし、発掘調査が行われた遺跡は極一部であり、詳しい内容は今後の調査に期待されるところである。

古墳時代

古墳時代の淡路島には古墳の数が少なく、現在知られている古墳の数は百数十基を数える程度である。しかも前方後円墳は一基も確認されていない。前期・中期の古墳の存在を想定できる遺物として、青銅鏡の出土が知られる。コヤダニ古墳（洲本市）出土の三角縁神獣鏡や宇山牧場古墳（洲本市）出土の素文鏡は、洲本平野を望む丘陵上に築かれた古墳の存在を知ることができる鏡である。そのほか、倭文委文古墳（南あわじ市）の内行花文鏡や殿熊遺跡（洲本市）出土の唐草文鏡もその可能性を示す数少ない

遺物といえる。後期古墳は、島内各所に築かれるようになるが、やはりその数は少ない。鳴門海峡に浮かぶ全長100mあまりの小さな島には沖ノ島古墳群（南あわじ市）が築かれている。約20基の小竪穴式石室墳を主体とする古墳からは、釣針や土錘、軽石製浮子、蛸壺を模した土器など、海に関する副葬品が発見されている。また、対岸にも海を生業の場とした人々が築いたとみられる鎧崎古墳群やしだまる古墳群（南あわじ市）があり、緑泥片岩製の棒状石製品が共通の副葬品として納められていた。このような小規模な古墳は島北部でも認められる。明神古墳群や石の寝屋古墳群（淡路市）などが海を望む丘陵上に築かれている。いずれも小竪穴式石室墳を主体とする古墳群である。

一方、この時代の集落遺跡として特徴的な遺跡が、島南部の三原平野で発見されている。雨流遺跡では、子持勾玉などの滑石製品、碧玉の原石、鉄滓などの鉄器生産関連遺物、須恵器模倣土師器、韓式系土器や大量の初期須恵器、様々な木器、多数の製塩土器など、島内の他の遺跡ではあまり出土しない遺物がまとまって出土している。また、木戸原遺跡でも、韓式系土器とともに多数の滑石製品、小型の鉄鋌などが、特徴ある遺物が出土している。いずれも５世紀代の遺跡である。

また、この時代を特徴づける遺跡として製塩遺跡がある。淡路島では、製塩土器が出土する遺跡が約80箇所確認されており、その内、実際に塩づくりを行っていたとみられる遺跡はおよそ30遺跡を数える。淡路島の土器製塩は、弥生時代後期後半に始まったと考えられる。初期段階の製塩土器である脚台Ⅰ式土器が畑田遺跡（淡路市）でまとまって出土しているほか、貴船神社遺跡（淡路市）、名子の浜遺跡、旧城内遺跡（洲本市）、伊毘遺跡（南あわじ市）などでも確認されている。しかし、発見されている土器量も少なく、開始段階では限定的で小規模な操業であったものと考えられる。続く、庄内期には、後期後半に塩づくりを開始した遺跡で操業が継続し、各遺跡で出土する土器量も増加する傾向が認められる。淡路島における土器製塩が定着してくる段階とみられる。古墳時代前期には、出土する土器量が減少するが、中期段階に再び拡大傾向に転じる。引野遺跡（淡路市）では、脚台式製塩土器から丸底式製塩土器への形態変化とともに、生産量が急激に拡大する様相が確認されている。続く後期から終末期にかけては生産量が飛躍的に拡大する段階であり、島北部を中心に、貴船神社遺跡や楠本塩入遺跡、並松遺跡（淡路市）などの遺跡が、東西の両海岸で確認されている。それらの遺跡では、廃棄された大型丸底式製塩土器が分厚い土器層を形成する状態で確認されるほか、遺跡の面積も飛躍的に拡大しており、塩の大量生産が行われていたことが想定できる段階である。その後の土器製塩は、貴船神社遺跡や並松遺跡等で律令期に継続することが確認されているほか、九蔵遺跡（南あわじ市）等、島南部でも当該期の製塩土器が大量に出土する遺跡が確認されている。

育波川流域における古墳は、現在のところ確認されていない。しかし、南に並走する室津川南岸の尾根上には、築鼻山古墳群の存在が知られている。播磨灘を見渡す尾根上に築かれた小規模な古墳群で、発掘調査の結果、３基の主体部が確認され、小竪穴式石室を有する６世紀後半の古墳群であることが確認された。また、室津川上流の生田畑地区で、蓋坏や提瓶が出土したと伝えられる林古墳、生田大坪の瀬畠古墳の存在が伝えられるが、詳細については不明である。一方、製塩遺跡は、育波川河口北に位置する育波浜田遺跡が古くから知られる。弥生時代の終末期から始まり、古墳時代後期に大規模化する遺跡である。遺跡からは、丸底Ⅲ式の製塩土器が大量に出土しているほか、イイダコ壺やサザエ、バカ貝など10種類の貝殻なども出土している。

奈良・平安時代

律令期における淡路島は、淡路国として南海道の一国に位置づけられ、津名・三原の二郡で構成される。三原郡におかれたとされる国府は、三原平野を中心にいくつかの推定地が知られているが、現在のところまだその位置は特定されていない。さらに、それぞれの郡衙もその位置は特定されていないが、津名郡衙については、淡路市北山の郡家長谷遺跡が出土した遺物などから、その可能性が高い遺跡といえよう。淡路国分寺は、現在もその法灯を灯し続けている。昭和60年に実施された確認調査では、金堂や塔の位置が確認されるとともに、寺域の想定範囲も確認されている。また、平成15年には寺域の西方で、瓦窯址が発見された。ロストル式の平窯で、国分寺の瓦を焼いた窯であることが明らかとなった。また、平成11年の調査で国分尼寺の位置もほぼ特定されている。さらに、この時期の古窯址が洲本市の南部地域や南あわじ市の南部地域など、南淡路を中心に確認されているが、そのうち洲本市大野古窯址群の土生寺窯では藤原宮の瓦を生産したことが知られている。このように、淡路島の律令期で中心的位置を占めていたのは、三原平野を中心とした島南部地域であったことが窺える。

しかし、淡路島最古の寺院である志筑廃寺（淡路市）は、島北部の志筑平野に築かれる。創建期の軒丸瓦が、藤原宮の屋根に用いられた6279b 型式の複弁蓮華文軒丸瓦と同笵であることが確認されている。中央と深い関係にあった豪族が建立した寺院ではないかと想定されている。

また、古墳時代に隆盛を極めた土器製塩は貴船神社遺跡（淡路市）や九蔵遺跡（南あわじ市）などの遺跡で継続されており、依然として主要な塩生産国であったことが、平城宮出土木簡などからも知られるところである。平成14年出土の木簡には、「淡路国 (津)(名) 郡 (来) 馬郷 (？)、戸 (？) 同姓男調三斗

勝宝四…」とあり、津名郡来馬郷より調塩三斗が送られたことが窺える。当時の来馬郷に比定される淡路市久留麻では、律令期の土器製塩に関わった並松遺跡や一本松遺跡の存在が知られており、その関連が注目される。淡路島が、若狭や伊勢とともに御食国とよばれた時代である。

平城京出土木簡には、育波郷に関係する木簡の出土も知られている。「淡路国津名郡育播郷二見里人大戸主海・稲村戸同姓三田次調三斗」や「淡路国津名郡育波郷月・里百姓戸海部飯万呂調三斗」などがあり、いずれも調として塩を送った荷札木簡とみられる。このことから、育波では律令期においても土器製塩が継続していることが窺える。同時代の遺跡としては、育波川南岸河口で調査された育波塩焼遺跡で須恵器や土師器などの土器が多数出土しているほか、育波堂の前遺跡でも緑釉陶器片の出土が知られており、当該機の遺跡が河口部に存在することが確認されている。

中世以降

平氏が隆盛を極めた頃、淡路島も瀬戸内海の海上交通権の支配に努めてきた平氏の知行国となり、その支配下に置かれた。しかし、源平の合戦を機に源氏の支配が及ぶ中、淡路島を支配したのは関東の有力御家人である梶原景時とされ、佐々木氏や長沼氏などが守護を努めた後、建武の新政以降、室町時代は細川氏が守護として支配する。応仁の乱の後は、三好氏の支配を経て、江戸時代には阿波蜂須賀藩の所領となる。

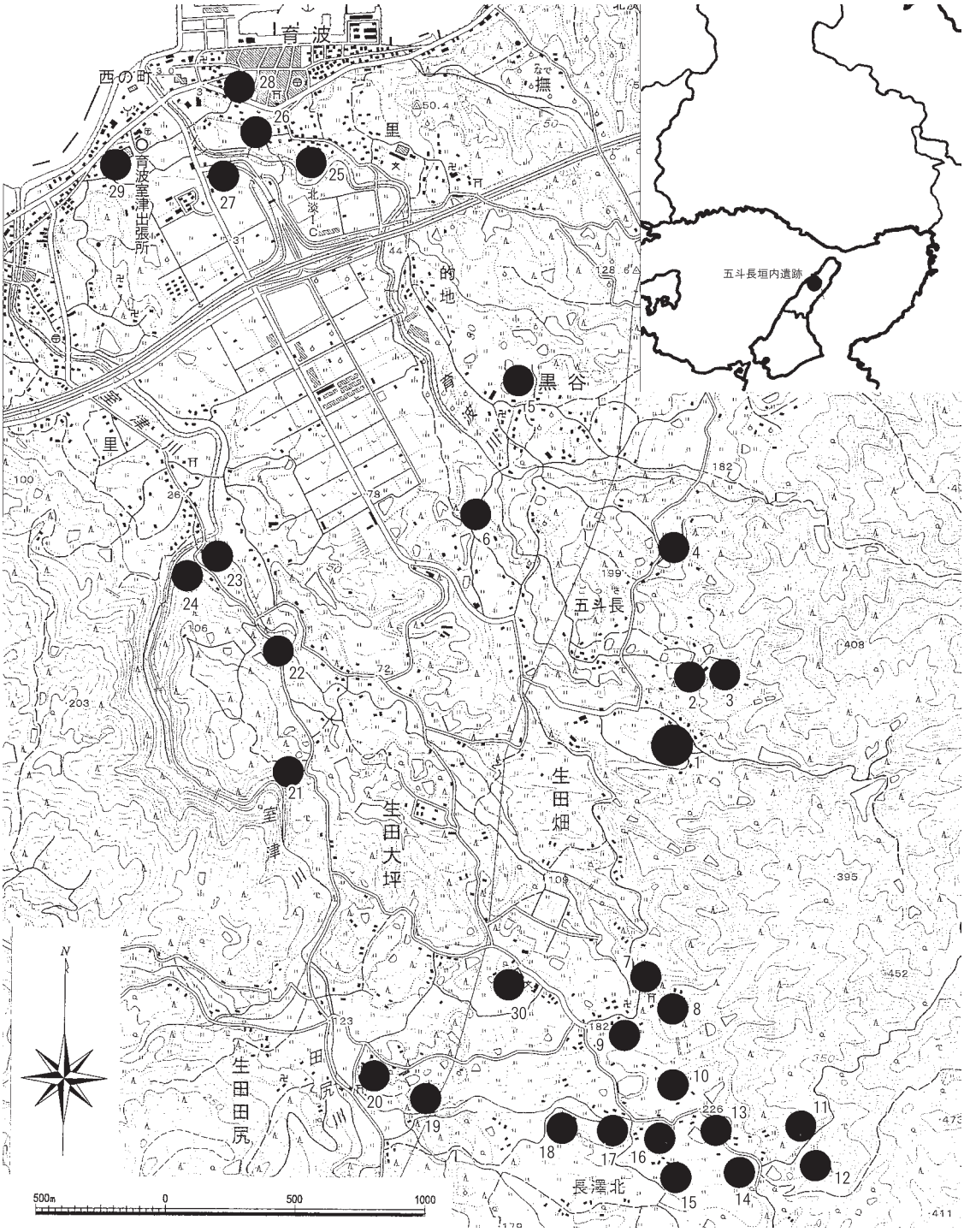
中世以降の淡路島では、遺跡数も増加する傾向にあり、淡路縦貫道路建設に伴う森遺跡（洲本市）や谷町筋遺跡（南あわじ市）の発掘調査以降、発掘調査例も増加している。島北部においても、佃遺跡、外町遺跡、尾崎堂ノ鼻遺跡（淡路市）などの調査をとおして当時の集落の様相が明らかとなっている。また、この時代の集落立地は、再び丘陵部にも広がる傾向を見せ、藤ノ木遺跡、井ノ谷遺跡などほか、

近年調査された山田地区遺跡群の調査など、丘陵部における集落の様相も明らかとなりつつある。一方、この時代を代表する中世以降の城館跡も島内各地で確認されている。淡路国守護の居館として細川氏が築造したとされる養宜館（南あわじ市）をはじめ、戦国期の地方豪族安宅氏の居城とされる炬口城、猪鼻城、白巣城（洲本市）など、山上に築かれた城館跡が今も良好な状態で存在する。このほか、島内に割拠した国人領主の居城とされる小規模な城館が各地に残されている。

育波川流域の遺跡では、河口の扇状地に立地する掛内遺跡の調査で、鎌倉時代から室町持代の家屋を中心とする居住形態が明らかとなる成果が得られている。また、寺門遺跡や薬師遺跡、全戸Ａ遺跡、全戸Ｂ遺跡、北坊遺跡といった遺跡が河口周辺に所在することが知られているほか、上流の丘陵部についても大道遺跡や黒谷小田遺跡、数河遺跡、庵遺跡など、数多くの遺跡が確認されている。しかし、これら遺跡の大半は、遺物散布地として知られているものであり、詳しい内容は定かではない。今後の調査が待たれるところであるが、この時代に遺跡の数が増加し、丘陵部にも広がりを見せることは確認できよう。また、この地域に築かれた城館としては、育波川河口北岸の丘陵上に築かれた育波城や五斗長垣内遺跡背後の山上に築かれた城跡（通称「城の背」と呼ばれる）、生田地区の備中館などが知られている。

参考文献

北淡町 1975『北淡町史』
兵庫県 1992『兵庫県史 考古資料編』
洲本市立淡路文化史料館 1992『淡路島の古墳時代』
兵庫県教育委員会 1993『製塩遺跡Ⅰ（津名郡）』
兵庫県教育委員会 『兵庫県遺跡分布図』
兵庫県教育委員会 1997『本州四国連絡道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 Ⅰ』
兵庫県教育委員会 1997『塩壺西遺跡　本州四国連絡道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 Ⅱ』
兵庫県教育委員会 1998『佃遺跡　本州四国連絡道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 Ⅲ』
兵庫県教育委員会 1998『本州四国連絡道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 Ⅳ』
兵庫県教育委員会 1998『まるやま遺跡　本州四国連絡道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 Ⅴ』
東浦町 2000『東浦町史』
洲本市立淡路文化史料館 2001『古代製塩の島 淡路』
兵庫県教育委員会 2002『まるやま遺跡 Ⅱ』
兵庫県教育委員会 2002『塩壺遺跡』
奈良文化財研究所 2002　平城第337次調査現地説明会資料『平城宮第一次大極殿院　西楼の調査』
津名町教育委員会 2004『志筑廃寺発掘調査報告書 Ⅰ』
三原町教育委員会 三原郡広域事務組合教育委員会 2004『国分遺跡 発掘調査報告書』
北淡町教育委員会 2005『北淡町遺跡分布図』



1．五斗長垣内遺跡（弥生・中世）
2．山ノ神遺跡（弥生）
3．柚ノ平遺跡（弥生）
4．妙神谷遺跡（弥生）
5．長守遺跡（弥生）
6．黒谷小田遺跡（弥生・中世）
7．大浅田遺跡（弥生）
8．林遺跡（弥生）
9．小久保遺跡（弥生）
10．上条遺跡（弥生）
11．笠松Ａ遺跡（弥生）
12．笠松Ｂ遺跡（弥生）
13．丸ノ内遺跡（弥生・中世）
14．松ノ下遺跡（弥生）
15．原尻遺跡（弥生・中世）
16．五庵遺跡（弥生）
17．酒屋遺跡（弥生・中世）
18．松本遺跡（弥生）
19．色目遺跡（弥生）
20．生田畑遺跡（弥生）
21．鋳文字原遺跡（弥生）
22．杭田遺跡（弥生）
23．野瀧遺跡（弥生）
24．室津土井遺跡（弥生）
25．全戸Ｂ遺跡（弥生・中世）
26．寺門遺跡（弥生・中世）
27．掛内遺跡（弥生・中世）
28．育波浜田遺跡（古墳）
29．育波堂の前遺跡（縄文～弥生）
30．備中館（中世）

第３図 五斗長垣内遺跡周辺の主な遺跡分布図